

獣医療におけるペットと飼い主の抱えるグリーフに配慮したケアを 実践するためのアプローチ法の検討

A study of approaches to practice care for the grief of pets and their owners
in veterinary medicine.

日本獣医生命科学大学獣医学部獣医保健看護学科 小野沢 栄里
Eri Onozawa, Nippon Veterinary and Life Science University

キーワード：グリーフケア、ペット、飼い主、獣医療

keywords : Grief care, Pets, Owners, Veterinary medicine

1. 調査研究の背景と目的

近年、獣医療の発展などにより、ペットの平均寿命が延び、飼い主も動物と過ごす時間がより長くなっている。ペットはいまや、「家族の一員」と呼ばれるほどに、多くの人々にとって欠かせない存在となっている。そのためペットが病気の診断を受けた際やペットを失った際の飼い主のショックや不安も大きく、より強いグリーフ（悲嘆）に苦しむ傾向にある。また、人医療ではグリーフケアについての認識が進んでいる²⁻⁵⁾一方で、獣医療においてグリーフやそのケアに関する認知度が未だに低く、グリーフケアに焦点を当てた論文は報告されていない。動物病院では様々なライフステージの子や、疾患を抱えた子が来院する。疾患の有無に関わらず、ペットと暮らす中で、ペットと飼い主はグリーフを感じることもある。そのような背景から、獣医療でも質の高いグリーフケアが必要になってくると考えられる。そこで本研究では、飼い主が感じるグリーフを明らかにし、獣医療におけるグリーフケアの普及に向けた適切なアプローチ法を検討した。

2. 調査方法

ペットを飼った経験がある人を対象にアンケートを作成し、調査を実施した。調査期間は2019年8月28日～2021年12月23日とし、調査方法は選択・自由記述式を用いた質問紙調査

法で、紙面とインターネット上で同様の内容を作成した。飼い主用アンケートの回収率は100%（212件）、有効回答率は80.7%（171件）であった。統計処理は、カイ二乗検定（Excel2016）を使用し、p値が0.05未満を有意差ありとした。

アンケート内容の概要は以下の通りである。

大門1：アンケート回答者の属性（性別、年齢、ペットを亡くした経験の有無）

大門2：グリーフケアという言葉の認知度と理解度（グリーフケアという言葉や意味を知っているか）

大門3：ペットを亡くした際の動物病院の対応について～死後のグリーフ～（ペットが亡くなった時の飼い主および動物病院の対応、ペットが亡くなったときに動物病院へ連絡したか）

大門4：ペットが病気であると診断を受けた際の動物病院の対応～生前のグリーフ～（病気の診断告知時におけるグリーフ、病気告知時の動物病院の対応について）

大門5：飼い主が動物病院に望むことについて

3. 結果および考察

「グリーフケアという言葉聞いたことがあるか」を「はい・いいえ」の二者択一方式で質問した結果、「はい」が34人(20%)、「いいえ」が137人(80%)であった。動物を飼った経験のある人の中で認知度が低いという結果から、動

物を飼った経験のない人の中ではさらに認知度が低いと考えられる。

「ペットを亡くした経験があるか」を「はい・いいえ」の二者択一方式で質問した結果、「はい」が123人(72%)、「いいえ」が48人(28%)であった。「はい」と回答した123人に「どこで亡くしたか」を質問した結果、「自宅」が113人(92%)、「病院」が9人(9.7%)、「自宅と病院」が1人(1%)であった。自宅でペットを亡くした人は114人(93%)と多い結果だった。ペットを家族の様に大事に思う飼い主が増えているため、ペットとの最期を自宅で看取りたいと思う飼い主が多いと考えられた。

飼い主が死後のグリーフケアに望むことは何かという質問に対し、「自宅でできることを教えてほしい」124人(73%)が最も多い結果だった。さらに、自宅でペットを亡くした際に病院に報告していない飼い主が74人(65%)と多い結果だった。動物病院は動物の死後も対応をしてくれる場所であるということを飼い主に知ってもらうことで、ペットが亡くなった後に動物病院へ連絡をするということに繋がると考えられた。また、動物病院側から亡くなった動物に対してできることに関して、グリーフケアを取り入れた形で支援でき、飼い主も自分自身で最期のケアと一緒に関わることができるのではないかと考えられた。

ペットを亡くした経験がある人とない人で「ペットを亡くした際、又は亡くすかもしれないと考えたときに病院側に望むことは何か」について集計した結果、「特になし」の項目以外、ペットを亡くした経験のない人の結果がペットを亡くした経験のある人の結果を上回った。「遺体をきれいにしてほしい」「今後について詳しく説明してほしい」の2項目において、ペットを亡くした経験のない人の結果がペットを亡くした経験のある人の結果より有意に高かった($p < 0.05$, カイ二乗検定)。また「特になし」に関しては、ペットを亡くした経験のある人の結果がペットを亡くした経験のない人の結果より有意に高かった($p < 0.05$, カイ二乗検定)。このことから、実際にペットの死を経験すると、病院対応の質を考えられるほどの精神状態ではないことや介入されたくない人もいるという事が考えられた。

生前のグリーフを経験した人と経験していない人では、経験をした人において「声をかけてほしい」「話を聞いてほしい」「特になし」の

3項目が経験をしていない人の結果を有意に上回った($p < 0.05$, カイ二乗検定)。一方で「治療の選択肢を与えてほしい」「今後の方針と一緒に考えてほしい」「自分の意見を取り入れてほしい」の3項目においては、生前のグリーフを経験したことのない人が経験のある人の結果より有意に高かった($p < 0.05$, カイ二乗検定)。このことから、実際に生前のグリーフを経験すると、治療などの事務的な対応よりも、飼い主自身の心に寄り添った対応が求められていると考えられた。

以上より、獣医療においてペットと飼い主に対するグリーフケアを実施するためのアプローチ方法として、普段からの飼い主および動物とのコミュニケーションをとるように心がけ、個々をよく理解した上で、グリーフの抱え込みが少ない早期の段階からグリーフケアを積極的に行うことで、ペットと飼い主の感じるグリーフを軽減でき、動物と飼い主との信頼関係の構築に繋がることが示唆された。

4. 引用及び参考文献

- 1) 阿部美奈子『動物と人の心に寄り添う 動物医療グリーフケア』 株式会社インターズー (2016)
- 2) 佐鹿孝子、坂口由紀子、久保恭子、藤沼小智子、杉山智江、鈴木優子他. 重い障害のある人の母親に対するグリーフケア(第2報)ーわが子の死を受容していく過程と支援の課題. 埼玉いか大学看護学科紀要, 6(1), 9-15. (2013)
- 3) 米虫圭子、坂口幸弘、田村恵子. ホスピス病棟に従事する看護師にとってのグリーフケア提供の意義とその影響. 公益財団法人 日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団 2009年度調査研究報告. 45-51. (2009)
- 4) 武田康男. 重症障害新生児のターミナルケアとその家族のグリーフケア. 脳と発達, 35(3), 228-232. (2003)
- 5) 山崎祥子、檜木野裕美. 小児がんの子どもをもつ親への死別前のグリーフケアに関する看護師の実践. 日本小児看護学会誌, 23(3), 42-48. (2014)
- 6) 木村裕哉. ペットロスに伴う悲嘆反応とその支援のあり方. 心身医学, 49(5), 357-362 (2008)

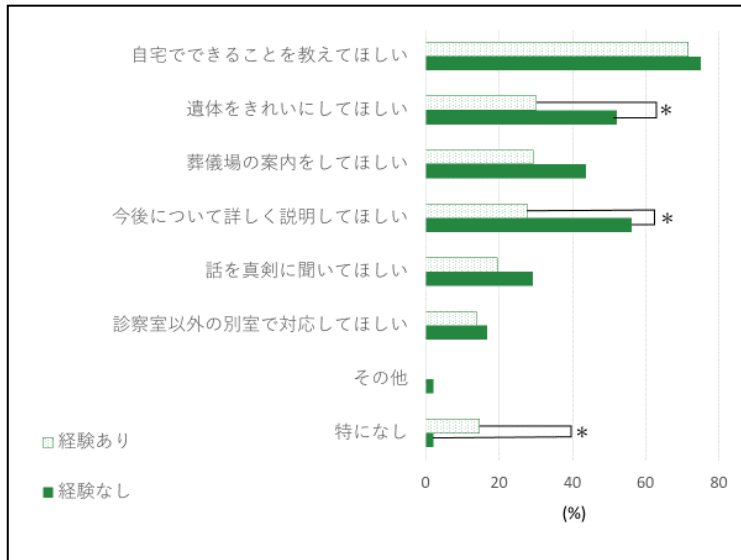


図1 ペットを亡くした経験がある人とない人におけるペットの死後に動物病院に望むことの比較

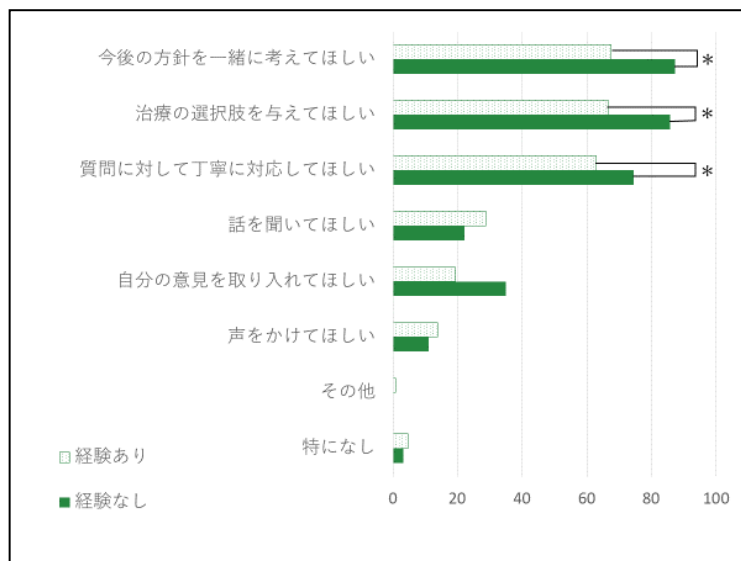


図2 ペットが病気であるという診断を聞いてショックや不安を感じた経験がある人とない人における動物病院に望むことの比較